

母親面接における「入れ子構造」の構築 その2

三船直子・倉戸ヨシヤ

Study on "IREKO" Structure in Mother Counseling

Naoko Mifune and Yoshiya Kurato

はじめに

大阪市立大学，児童家族相談所紀要20号に，筆者は「母親面接における入れ子構造の構築—その1」と題して，母親面接の構造的考察を試みた。特に筆者が注目したのは，患者がセラピーに現れない，母親のみが来談するケースについてである。「その1」では神経症レベルの登校拒否，女子中学生の母親との面接事例をとりあげた。その中でセラピストとクライアントである母親との関係をたどり，母親と患児との関係の変遷を論じた。セラピスト—クライアント関係が，クライアントとその子供の関係にどのように作用し，どのような新たな関係を構築していったかを考察した。母親面接において構築される「入れ子構造」について図示化を試みた（参考図1）。本論文では，精神病レベルの混乱を呈した子供をもつ，母親との面接事例をあげて，「入れ子構造」試論をさらに検討したい。

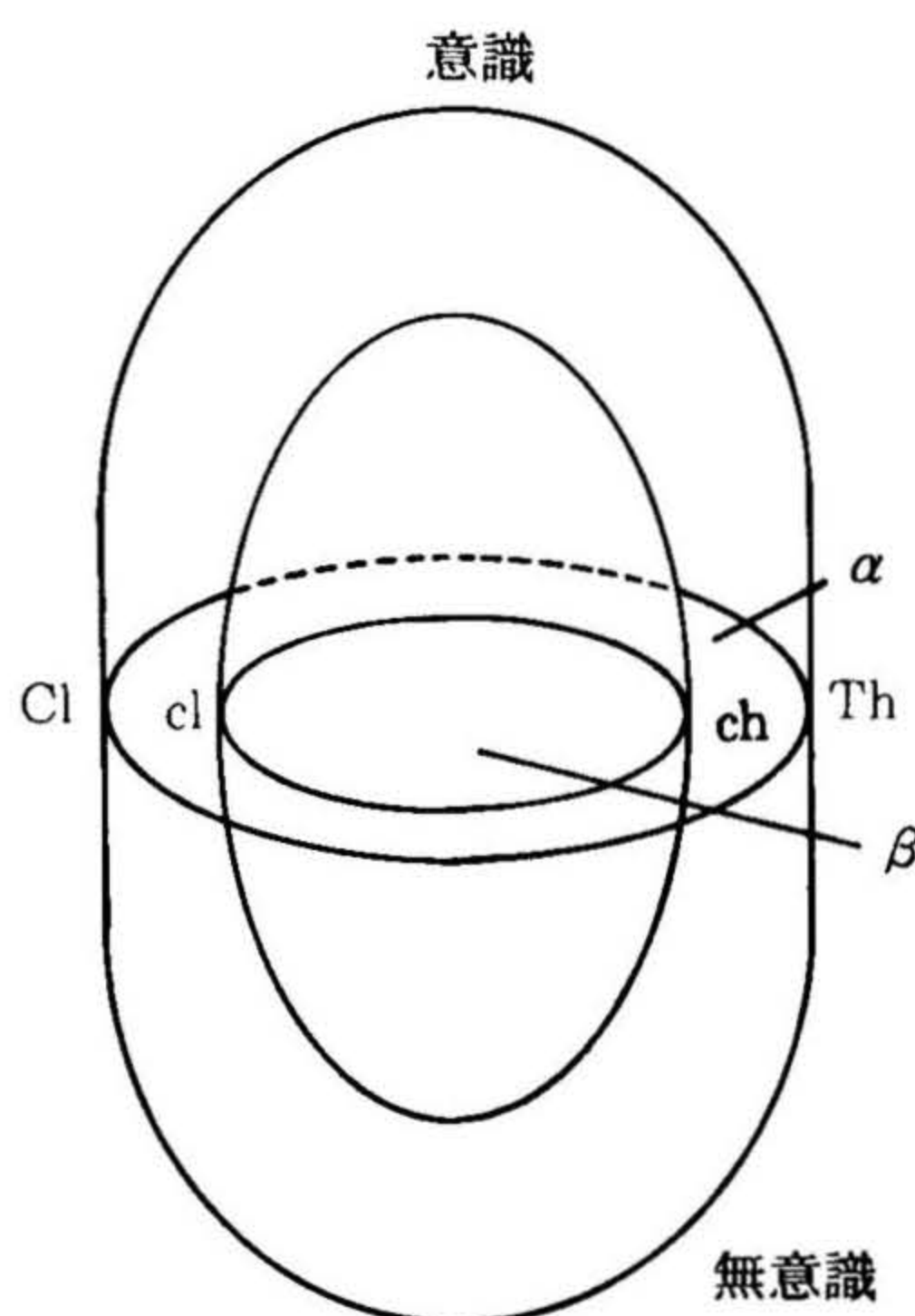


図1 1993. 三船

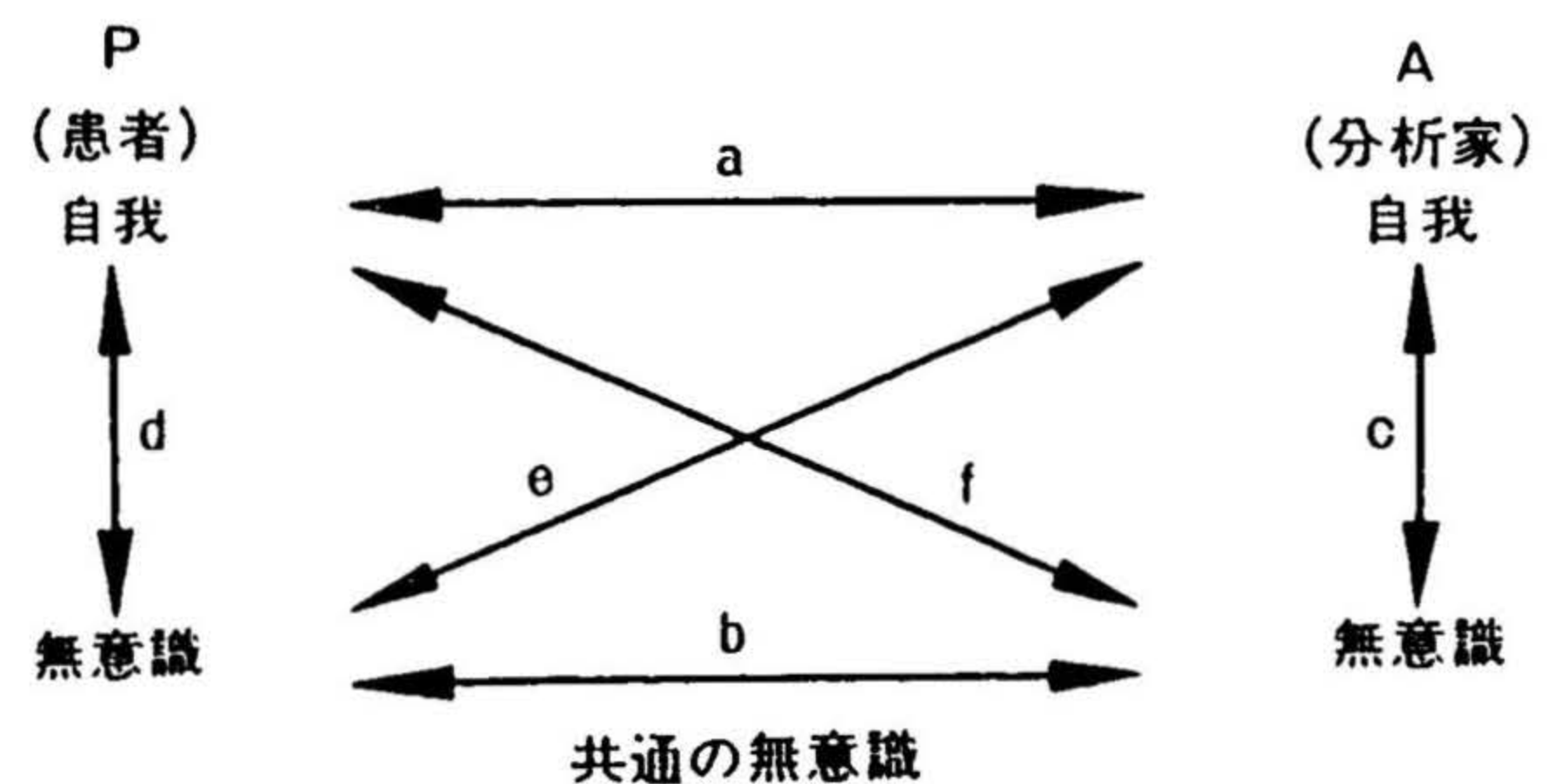


図2 1984. M. Jacoby

I. セラピスト—クライアント関係について

1 転移—逆転移

ユングは「転移の心理学」(1953)で，セラピストとクライアントのセラピー関係におけるセラピスト，クライアント双方の心的変化と関係を，錬金術の物質変化の過程に見だし，その象徴的意味を明らかにした。そこでは，セラピストはセラピー関係の中で生じる心的変化の容器であると同時に，またその容器の中で，クライアントと共に心的変化していく主体として描かれている。さらにこれはより単純化，整理された形として，セラピスト—クライアント関係のダイアッド（1984, Mario. Jacoby 図2）として知られている。転移—逆転移を論じることは本論の域をはるかに越えた大きな問題ではあるが，一言筆者の現時点での考えを述べておきたい。個々のケースは一回限りの生を生きる，ただ一人のクライアントとセラピストとの出会いの記録であり，非常に個別的なものである。と同時に，セラピー関係を切り結んだ両者の間で，決して避けて通ることのできない重要な問題をふくんでいる，と筆者は考えている。ましてや，セラピスト—クライアントの関係性を問題にする場合，双方の無意識的なダイナミズムを常に心にとめて，論じるべきであろう。この考え方は，ユングの言うように，

セラピー関係はセラピストとクライアント双方が変化、変容する過程であるという考えに基づいている。クライアントの変化をとらえるセラピストの視線は常にクライアントの影響を受けて、変化する自己自身にも注がなければならない。

筆者の試案である「母親面接における入れ子構造の構築」はこのユング（1953）の考えを基に考察されたものである。

さらに付言すると、いかなるケースレポートもセラピストの実感を通して語られた物語であり、それは言わば客観的な事実であるというより、セラピストとクライアントが作り出したクライアントの物語りーすなわち、このセラピストとこのクライアントの間に生きられたクライアントの物語りであるという視点も重要である。

2 「元型」という概念

さて、この「物語」をとらえるさいに重要な概念として元型について一言述べておかねばならない。

元型についてのユング派の術語解説（1985）を参照すると以下のように書かれている。「それ自体としては現れることはない。しかしその作用は元型的イメージないし観念として意識に現れる。それらは集合的無意識に由来する普遍的なパターンないしモチーフであり、宗教、神話、伝説、おとぎ話の基本的な内容である。それらは夢やヴィジョンを通して個人に現れる。」と解説がなされている。さらに、元型と関係深い項目として、「コンプレックス」の項を見ると、「強い感情をおびた概念ないしイメージのグループ。コンプレックスの「中心」には元型または元型的イメージがある。」と解説されている。

すなわち、実際のセラピーにおいては、クライアントの夢やクライアントとの様々な対話のなかに現れるそのクライアントのイメージ群のなかに「物語り」として自ずら現れてくるものであり、これを筆者はセラピーの中で特に注目し、大切にしている。

E. Neumann の膨大な著書である「意識の起源史」（1971）は個人の意識の発達と深く結び付いた元型（イメージ群）の発達を文明史の中に辿ろうとした試みである。その後、分析心理学者の一群は「引き裂かれた元型」の考え方に到達した（1981樋口）。対極的な元型という考え方である。これは関係性の元型と言うことができるものと筆者は考えている。さらに言えば、Neumann の考察した元型は単極性の元型、「引き裂かれた元型」— Guggenbuhl—Craig. A（1978）の元型は双極性の元型と言うことができるであろう。

本試論はこの双極性の元型の考え方から大きな影響を受けている。これについてはケースの考察において再度、

取り上げるつもりである。

3 入れ子構造とは

「その1」（1993）では神経症で登校拒否を生じた A（女子中学生）の母親とのカウンセリングを通して、セラピストとクライアントの関係の進展と平行してクライアントである母親と A との間に展開していった関係の様子をレポートし、この関係の全体を「入れ子」になぞらえて論じた。A はついに面接に現れることはなかったが、やがて登校拒否状態も改善され、自ら登校を開始し、無事進学を果たした。

同様の経験を男子高校生（C）の母親との面接でも経験している。このケースも登校拒否児本人の来談はなかった。いずれの母親との関係も、母子平行面接で行う母親面接のガイダンスの域を越えて、母親個人の問題と母子関係を話し合うものとなった。セラピスト—クライアント関係の深まりの中で、クライアントとその子供の新たな関係が進展していったのである。このセラピー関係と親子関係の変化の同時、同型の進行を「入れ子」と見立てたのである。（図1参照）

これは母親が体験した新たな関係性が最も親密で重要な関係（親子関係、夫婦関係）を再構造化していく過程ととらえることができるであろう。このセラピー過程は、セラピストが面談には現れなかった子供自身の気持ちを体験し、またそれをフィードバックする中で、母親が時にはセラピストとの間で子供を体験しつつ、幾重にも重なった関係を双方が体験することで織り成されていった（1993参照）。この体験は母子関係を懐に入れながら、進展していくセラピー関係だということができる。なお、残された課題として、この入れ子構造のなかで、セラピストとクライアントの心的なダイナミズムはどのようなものであったのかという考察が残されている。言い換えれば、セラピストは両者の関係をどのように体験し、どのような物語を生きたのか、それは親子関係を語るクライアントの物語りにどのような変化をもたらし、どのような物語が進展していったのかという考察である。

本稿では、精神病レベルの混乱を呈した18歳、女子高校生の母親との母親面接の過程を提示し、セラピストとクライアント関係をⅠ—1,2で上げた考え方に照らし合わせつつ、入れ子構造のダイナミックスについて論じたい。尚、事例の提示にあたってはクライアントのプライバシーの保護のため、一部を修正していることをお断りしておく。

Ⅱ 事例提示

1 概要：患児 B 子；現在19歳—発症時17歳（高校

3年時), 登校拒否から始まり, 主として母親に対する暴力, 混乱状態。精神科受診, 向精神薬の処方。現在は週に2,3度, 調子の悪いときは毎日点滴を受けに行く。高校を1年遅れて卒業後, 現在予備校在籍(調子のよいときだけ受講に行くという状態)。

2 家族: 父親51歳, 会社役員, 母親—CL51歳—自宅近くで個人経営の店をもつ。母方祖父 82歳とB子の4人家族。CL夫婦は結婚数年後にBをもうける。妊娠を機にCLは勤めを辞め, 家庭に入る。CL自身は自分のしたいと思っていることが色々あったので, 子供は欲しくなかったとのこと。また子供が出来たのを機に, CLの母親が病弱なこともあり, CLの実家に同居し, 現在に至る。CLの実家は資産家である。同居に際してはCLの弟との間でトラブルもあった。

3 現病歴: 結婚後, 数年後にできた子供。一人っ子。Bが幼稚園, 年長組に上がり, CLの実家に同居するまでの数年は子供を預けて仕事に出ていた。同居後, クライエントは店を開く傍ら家事, 両親の面倒をみる。Bは幼いころから手のかからない子供であった。小学校時代も非常におとなしく, 成績抜群, 何も心配することのない子供という印象をCLはもっていた。小学校3年時より, 塾に通い, 有名進学校に入学する。友人関係は少なかったがCLはあまり気にすることはなかった。Bは学校であったことを細かにCLに話し, 一々母親の指示を求めた。高校2年の終わり頃から自室にこもり, 登校拒否状態になる。CLに対する暴力が始まる。CLの唯一の趣味である洋服のほとんどを切り裂くなどもおこなっている。CLに対する暴力を止めに入ったCLの実父に対しても, しだいに暴力的になり, 怪我をさせるなどの状態になる。病院に連れて行ってほしいと言うBに対応しかねている内に, Bは混乱状態に陥り, 自分で救急車を呼んで, 精神科へ行こうとし, 精神科クリニックに受診することとなる。Bは薬物中心の治療を受けている。学校側の配慮もあり, 1年遅れて卒業となる。現在, 予備校に在籍している。

4 来談動機: CLはドクターとほとんど話が出来ないので, Bとの関係も含めて今後のことが相談したいとの事であった。

次に来談から1年の経過を提示する。セラピーはこの後も継続しているが本稿では入れ子構造についての考察のために初めの1年に限って考察する。

5 面接経過: 199*年から199*+1まで。2週に1度, 計25回。1年間の面接の流れを次の4段階に分けて, 提示する。これはセラピストとクライエントの関係性の段階とクライエントとBの関係性の段階を見ていくた

めに, 現時点で便宜的に分けてみたものである。

第1段階: 「関係の入り口」199*年10月から199*+1,1月

第2段階: 「関係の確立」199*+1年2月から5月

第3段階: 「関係の中で」5月から7月

第4段階: 「関係を生きる」7月から10月

以上のように分ける。

なお以下の記述でTh.はセラピスト, CLはクライエントの略。<>はセラピストの発言, 「」はクライエント発言。*以下はセラピストの印象や感想など。

第1段階: <関係性の入り口>

199*年, 10月から199*+1,1月 #1~#8

(#1) CLはBの現状についてメモを見ながら, 簡潔に話す。家族およびBの治療状況, 面接に対してのCLの希望などを聞く。夫は仕事が忙しく, 子育てはCLに任せきりで, CLとCLの実父の二人で育てる。「かくあるべし, を厳しく守って完璧に育てて来たつもりだった。それがこんなことになってしまった。子供を自分の分身のように育てて来たが, 最近, やっと方向転換ができるようになって来た。」「現在の成績では進学は無理。大学にはもう行かなくてもいいと思っている。Bは行きたいと言っているが現実が見えていない。」などBの今後の見通しを細かに話す。<先の見通しがよすぎるのですね。>「アドバイスははっきりと言って欲しい。でないとわからない。箇条書きで言ってください。」*明快なアドバイスが得られないことに苛々している印象であった。

次の予約はキャンセル。

(#2) 「Bは先週は非常に調子が悪く, 終日ぶつぶつ独り言をいっていた。あれ以上悪くならないように押さえるのにやっきで私も非常に疲れた。その日は入院をしたときのことを思い出して, 誰も頼りにならない, とBは言っていた。子供のころからレールを敷いて, エリートコースを歩ませた。ずいぶんの資金もつぎ込んだのに, それはBにとっては迫害で, こんなことになるなんて。」セラピーにCLがくることには夫は反対している。またBにも内緒で来ているとのこと。(#3) 家族旅行の話から, CLは外向的, 自分で感じたことは何でも話し, 周囲の人にも気楽に質問したり, 話しかけたりできる, 何でも知りたいと思うタイプ。Bと夫は自分の感覚を大事にして, それを人と分かち合おうとしない, という違いを話される。「Bは暇だ, と言っているがどうすればいいのか。」<暇なのはBさん。心配はお母さんの中で生じていること。>「えっ。」またCLはBに自分がセラピーに自分が通っていることを話す。Bは行かなくて

いい、と言っていたが、Bはドクターがいるが私にはいないから行きたい、と話す。Bに隠し事がなくなってほっとした。(＃4)一昨日の夜、Bは調子が悪くて、叩かせろ、と平手打ち。新聞をずたずたにする。以前なら私の服だったので、随分まし。『私だけを見ていて』と英語で新聞になぐり書き。買い物やコンサートなど二人で出掛けた話。CL自身の子供時代を振り返る。もしかすると最近になって、漸く私は父親(CLの父親)に反抗し始めているのかもしれない。Bが暴れ出したときなど、口を出したがる父に、お父さんはあっちへ行っておいて、と言えるようになった。(＃5)学校へは卒業の日数は足りているが順調に行っている。子供は欲しくなかった。Bは可愛いと思っているが。何もかも私のせいにされる。病院ではBは今のうちだから、お母さんに気持ちをどんどん出すように言われているらしい。＜Bにとって一つ一つの葛藤をどうやっていくか。お母さんを相手にひとつずつ、納得のいく答えを探している様子。＞CLの高校時代の話。Th.の出身校をたずねる。同じ校区、「昔はY高校(CLの出身校)の方が成績は上だった。」「自分のためにどんな趣味をもつことができか、考えている。近所の主婦とは話が合わない。つきあえる相手は限られている。」(＃6)昨日、Bが荒れた。昨年、学校にいくために旅館に泊まり込んで通わせていたことを思い出して、責めて来る。『悪くなるのを喜んでいたのである。』『そんなことはない。』と突っぱねた。謝れと言われてどうしても謝れない。夫と二人で決めたことだから、と夫に電話して帰って来てもらう。夫は謝っておけばよい、と言う。夫が帰ると収まる。ドクターのところに行きたがったので予約をする。なぜ、謝れないのか。Bに言っていることを認めることはできない。＜Bが求めているもの、お母さんが応えようとしているものについてもう少し考えてみませんか＞。(＃7)Bが謝れ、と迫るとき、何を求めているのか、私はBを苦しめるつもりはない。数学の問題を解けなくて、苛々して、去年の旅館のことをBは思い出した。＜Bにとって、旅館での体験は結果的には、現実問題はクリアーできたが、Bの無理のうえに成り立っていたよう。＞Bの為にやったのに。迫害になってしまった。＜ただ、とても苦しかったと言っているのではないか。＞…。この1週間は調子がよかった。Bがご機嫌。親子3人で映画を見に行った。よくなっている。表情は豊か、翌日学校にも行く。＜誰のための楽しみですか。＞、＜事実の羅列と事態解決の方策の話でお母さんの気持ちがつかめなくて、私はいま少しいらします。＞*CLはほっとした表情になり、夫との夫婦関係の話になる。初めてしみ

じみと泣かれる。(＃8)「誰のための楽しみかと言われて、目から鱗が落ちたよう。今まで正面を向いていなかったような気がする。夫にも少しずつ、任せられるようになってきた。」*正月の様々な出来事について生き生きと話される。

第2段階＜関係の確立＞

199*+1年1月から4月 　＃9～＃14

(＃9)CLが、店を開く頃の苦労話。店の経営に没頭し始めた時期、Bは小学校2,3年。成績抜群だった。反面、友達が家に遊びに来て、30分ほど、本をよんで気持ち落ち着かせないと会えないような所もあった。出来れば沢山の友人を作りたいと思って、どんな子を友達にしたらいかなど、一々話し聞かせた。自宅から遠距離の塾に通わせ、送り迎えは祖父が引き受けてくれた。昨日、Bが少し荒れたとき、その頃のことを思い出して、小学校の3,4年頃に付き合っていた友達とそのまま、付き合っていたかった。ママが押さえて、みんな来なくなってしまった、と責められた。2年前、Bは部屋を真っ暗にして、まったく風呂にも入らず、籠もっていた。最近、一緒に寝てくれという。昨日の朝、Bの部屋で目覚めて、まるで、胎内にいるような感じだった。あたたかだ。(＃10)Bは中学の時の友人とのトラブルを思い出して暴れる。暴れると怖かった。謝った。2日ほど寝込んでしまった。(＃11)Bは卒業式に行きたくないと言う。私も近所に同じ学校に行っていて、今年卒業の人がいて、式場で会うのは辛い。Bがぐずぐず言い出すと、つい押したくなる。(＃12)Bは卒業式の前にクラスメートに書いてもらったサイン帳を読んで吐く、泣く。Bにとって辛いことが書かれてあった。向こうも悪気があった訳ではないが、Bには酷だった。卒業式当日、Bは起きて来なかった、まあいいか、と待っていると、祖父が起こしに行き、出掛けることになる。陰から見えてやった。やっと勝ち取った卒業と思ってうれしかった。(＃13)Bの上機嫌の後は落ち込むというパターンがわかってきた。つい、私が安心してしまふのかもしれない。冒険だが、卒業祝いに親子3人で、旅行へ行くことにした。(＃14)旅行中の話。

第3段階＜関係の中で＞

199*+1年5月から7月 　＃15～＃21

(＃15)Bは迷った末に、予備校に通い始める。友達を作りたい、まずはそのためにということで5月から、調子のよいときだけ、登校。3日ほど詰めて出掛けては、調子が悪くなって休むというパターン。＜がんばり過ぎるところは緩めてあげる役割を。＞(＃16)Bは毎日、服を着替えて出掛けて行く。そのために、服を買え、も

しくはそのためのお金を要求する。夫に交渉させた。夫も昇格以来、休みの日も働いている状態。酒量も増えて、疲れている様子が目につく。Bは服を買いたいのに思うように買えないことで苛々して、当たる。買い物に連れて行っても、見たものは何でも自分のものになると思っような様子。いつ叩かれるかと思うと胃がきゅーっと痛くなる。(＃17) テスト結果が出て、Bは落ち込んでいる。つい励ましてしまう。順位にこだわっている。私は大学進学など諦めているのに。Bには困ったら私が助けてくれる、というのは少し通じて来たようにも思うが。しばらく、予備校を休んでいて、6月からしばらく、1日2時間くらいのペースで通っている。しんどいと言うので駅まで、車で送迎。Bがしくどくて苛々して、私の顔を引っ掻きにくる。出て行け、と言われて、『そんなに私がいるのが苦しいなら出て行く。』と出ようとする、夫が一言でぱっと止めてくれた。＜がんばったらあかんのやな。ゆっくりなんやな。＞(＃18) Bは予備校で友達を作ろうと必死の様子。帰って来ると、表情が険しい。当たり散らして、物を投げつけたり壊したりする。こんなにしんどいのかと思ったら泣けてきて、かわいそうで。＜Bが一番難しい課題に取り組んでいる。よくここまで支えてこられた。＞*CLはひとしきり泣かれた。Bが陰悪になって、もういやだ、と思ったときに書いたという手記を見せていただく。(＃19) 服や装身具を買えというBの欲求がどんどんエスカレートする。予備校の友人からは少し離れて、家庭教師と楽しく談笑するときも見られるようになっている。＜服はBにとってどういう意味があるのだろう。＞(＃20) Bが大暴れする。ママが悪いと言って、何度も顔を叩く。夫に水やお茶をかける。夫が制止すると、一階においてある夫が飼っている熱帯魚の水槽をひっくりかえした。その後、夫が怒って、『出て行け』と言う。Bは外に飛び出す。探し回っている間に、戻って来て、その後家出。親戚宅から電話。一泊する。居心地がよくないらしく翌日、本人が電話をかけてきたので、迎えに行く。後で落ち着いてから聞くと、Bは親戚から借金をして自活するつもりだったと話した。また、預かりものの隣家に届いた金券を勝手に開けて使おうとする。他者の気持ちなどBには全く分からない。二代で必死に築いた家ももう終わりだ、はかないものだ。(＃21)「昨日もBが暴れた、調子が悪いらしくて、この2週間に10回ほど点滴に連れて行った。予備校から帰って、顔を叩く、食卓の用意を引っ繰り返す。なんだか情けないというかあほらしくなって、夫に電話して帰ってきてもらい、私は飲めないビールを飲む。1瓶飲んですっかり酔って、犬の毛を刈った

りした。夫が心配していたよう。私は少し発散できたような気がする。」

第4段階＜関係を生きる＞

199*+1年8月10月 21~25

(＃21) 前回ここに来て、帰ってみると、店の事務所がめちゃくちゃになっていた。出掛けたママが悪い、とBは済ましている。あれだけやったら気がすんだらしい。前から要求していたお金は夫と相談して、渡してやることにした。それをもって買い物に出掛ける。私もお供。デパートではBは自分で段取りを立ててそれなりに、さっさと買い物をしている。『私は仕切りたがり。』とBは言う。今まで全部私がBのことを仕切ってきたのか、と感じた。予備校へはほとんど行っていない。(＃23)「予備校の後期が始まったが苛々している様子。夫に当たり散らしている。夫は平謝りに謝って、自分で自分の頭を叩いたりする。夫にまたお金を要求している。」この話から、CLが店を始めてから夫の収入がいくらあるのかCLは知らない、ということが語られる。「Bは無尽蔵にお金があるように思っている。」夫婦関係の話。「Bについて少しずつ分かって来た。ものすごくガキ。私の手のひらとは言えないが、胸の中で暴れている感じ。時々そこを抜け出して大暴れする。Bもこれからが大変な時期、Bに専念してやりたい。」＜ご主人の協力もますます必要になって来ますね。＞。(＃24) Bを満足させた方が勝ち、嫌々我慢してやるのではなく。あの子の喜ぶ顔を楽しみにして。*かなり激しく泣かれる。(＃25) Bは2週間まったく出席していない。点滴にも毎日通っている。背中を叩かれたり、殺してやる、と首を絞められた。夫はそばで見ている。また別のときには、Bが出て行けと言うので、私が出て行った。外から夫に電話。帰って来てもらう。入院させたい。(入院を巡って話し合っていくなかで、CLは少し気持ちを取り直していける。)

Bがパニックになったとき、受け入れられない。でも弱いところも見えて来てはいる。

以上、母親セラピーを始めて1年間の経緯を4段階に分けて報告した。ケースレポートによく使われている、第**期という分け方をあえて行わなかったのは、本論の中心テーマである、入れ子構造におけるダイナミズムの進展を見ていくうえで、徐々に深まっていく関係を段階的に追っていくと考えたからである。

Ⅲ. 考察

1. 事例考察

精神病レベルの混乱について

本ケースにおいてCLはクリニック医師によるBの診断名を聞いておられる。ここでは筆者が用いた「精神病レベルの混乱」という言葉を定義しておきたい。

一般的にはセラピーに訪れたクライアントがドクターにかかっておられる場合、ドクターの診断、またCLが受けている薬物治療などの情報はセラピーを始めるにあたって、重要な情報であり、それによって治療方針や治療目的を明らかにするための基礎的な情報であると考えている。しかしセラピーにおいて病名そのものよりもさらに重要なことは、クライアントが抱く不安がどのレベルの不安であるかという点である。それによってクライアントの現在の自我の強さを知り、セラピーを行って行くうえでの指標となる。

ここで言う精神病レベルの混乱とは、自己の不安へのとらわれの大きさゆえに、対人関係において、深く大きな混乱状態を呈していることを意味する。そのために対人関係において深く大きな傷を負っているかも知れないという心構えをもって接している。二人で安心して一緒にいることを目標にして、セラピーを始めるように心掛けている。抱えの環境(1990神田橋)により細心の留意をすること以外、他のセラピーと変わることはない。

本ケースのBの場合も自立がその発達課題として意識されるにあたって、深い混乱を経験しなければならなかったものと考えられる。

関係性の面からとらえると、「一人になるため」—第2の固体分離期(1981)にあたって、母親とここまで深くかわらねばそれが果たし得ない状態であると考えられることができよう。まさにCLの言葉を借りれば、「やること、言うことは18歳だが、精神的には3歳の子供のよう」な状態が再現されていると考えられる。このような状態は他の青年期の事例報告でも多く目にするものである。B自身の治療と発達にはBの主治医の委ねておける環境があるので、Thはむしろ、CLとBの親子関係に注目して、セラピーを進めていくこととなる。

事例の経過にそって

第1段階：セラピストとクライアントの出会いの段階である。現れたクライアントは年齢よりもはるかに若々しく見え、知性の勝ったタイプの女性であった。メモ帳を取り出して、それを見ながら出来事のあらましを非常に事細かに、整然と話していかれた。クライアント自身の感じに対するセラピストの問いには、一切応じない風情であった。#1の最後に、アドバイスは箇条書きにして、話してほしいという要求にも明らかにように、この時、クライアントに映ったセラピスト像は、明確にこと

を言わない頼りがいのない存在であつたろうことは想像に難くない。その次の回はキャンセルであった。これはおそらく明確な回答が得られなかったことに関する否定的な感情の現れであつたとセラピストは感じている。また同時に、ぱっと気の利いた役立つことを言えないセラピストだと、セラピスト自身もクライアントによって感じさせられてもいるのである。セラピーのキャンセルは一つにはセラピーに求めているものを得られなかったことに対するクライアントの反応である。2回目のキャンセルというのは筆者は他のセラピーでも少なからず経験している。セラピーに何を期待するか、その期待が外れたさいの反応であろう。セラピストは既に何か動き始めた現れとして、その意味を考えながらゆっくり待っている。問題が深刻で、急を要するものであると思われれば思われるほど、CLが即時的な解決を期待することは何の不思議もないのである。意識が求めているものを得られなくても、動き始めているダイナミズムに焦点を当てていることが、セラピーを進めていくうえで、何よりも重要な事であろう。またクライアントにはセラピストを選ぶ権利もあるのである。

3週間後に現れたクライアントはセラピストが責めない分、自分のこれまでの子育てについての自責の念を述べられた。また夫がクライアントが相談に来ることに反対していることを述べて、一人で子供の問題を解決することのできない無力感を話されたのである。

第1段階を通して、クライアントはBの言動を事細かに報告していった。その折々にクライアント自身の子供時代なども語られるが、「子供が大人になっていくときの苦しみとかは分からない、それどころではない時代だった。」「父親は厳しい人だったが、母親とは非常に仲のよい夫婦で、私にとっては手本だった。」「しなければならないことはすべてちゃんとやって来た。」「ほとんどの人物評価は学歴評価に基づくなど、なにか無味乾燥な印象をセラピストは抱いた。Bの状態の悪しきにつけよきにつけ、クライアント自身がどのような感じを抱いているのか、生身のクライアントの感情を知りたい、それに触れたいとセラピストは強く思うようになっていった。クライアントは事実の羅列によって、自分の行ったことに対する承認を求めている。さらに今後何をすればよいのかの方策を求めている。根本的にはアドバイスは箇条書きで、と言う姿勢に変わりはない。セラピストは終始、クライアントの求めている知的な対応のできるセラピストではなかった。「事実はよく分かるが、お母さんの気持ちがつかめなくて実はさっきから苛々しています。」(#7)というセラピストの実感の吐露は、一つの

関係が既に布置されつつあったからこそ言えたことのように感じられる。これより以前のどの回であっても、この言葉は破壊的に作用したかもしれない。いや実はクライアント自身の自分の気持ちや感情は話の中に徐々に出てきていたのかもしれない。だからこそ余計に、何日の何時に何があった、という報告にセラピストは苛立ちを感じたのではないだろうか。よくなってきた、Bの表情も豊かになってきた、学校にもよくいっている。こう報告するクライアントに〈誰の楽しみか。〉とセラピストは対決することになる。このとき、セラピストはBの気持ちを体験していた。ある意味で体験し続けてきた、といってもよいかもしれない。

セラピストからすると、クライアント自身の子供性、子供のイメージはなかなかつかめない、クライアントのなかの治療者像、治療者イメージはなかなかセラピストにはひびいてこなかった。むしろ、しっかりした、頼りになる治療者像はセラピスト側に投影され、それにかなわないセラピストに精緻な報告を行うことで、理解を求めているクライアントが存在していたようである。またこの精緻な報告は誰よりも子供のことを一番よく知っているのは母親なのだから、もしくは母親でなければならない、というメッセージだったのかもしれない。これはセラピストならクライアントの体験をすべて知っておかねばならないという意味でもあった。

子供は事態を知的に把握していなくても、自分にとって深いつながりのあるものについて、言葉ではない把握が可能であり、また感じることでできないものである。大人からみればこれはあやふやな危なっかしい姿でもある。分からないことを分からないまま受け入れられる、分からないことに何らかの可能性を感じるがゆえに、知的に解釈しないままに存在することができるのが、子供性、子供のイメージではないだろうか。セラピストはクライアントの中に、このような子供性の存在を感じ取れなかった段階であった。ログスで隔てられたセラピストとクライアントをセラピストは感情、気持ちというエロスでつなぎたいと苛立っていたのである。そして、言い方は平静を心掛けてはいたが、「苛立っている」という感情表現で伝えたことも意味深いことのように思われるのである。セラピストとクライアントの関係のイメージは深く途切れていたように思われる。セラピストはあくまでセラピストであり、クライアントはあくまでクライアントであった。

同様にBとクライアントの母娘関係も深い亀裂が生じているように思われた。母親はあくまで母親であり、自己のなかの不確定な可能性としての要素は排除され、

定められた義務と責任を果たすこと、またその成果に自己の価値がかかっていた。娘はあくまで娘であり、内側に母親イメージをもてないことによって、無力な存在となっていた。Guggenbuhl-Graig. (1978) は母娘元型が分裂している時、母親と娘の関係で力の問題が大きな役割を演じ始めることを指摘している。すなわち、「自身のなかに娘-娘的な要素やイメージが存在することを忘れてしまっている母親は、弱点を全然もたない、完全な母親であろうとし、このような母親の娘は、頼りのない完全に強い母親に頼り切った弱々しい娘であるだけの存在となる。母親は力でもって娘を支配する」ことになる。本ケースのクライアントの場合、これは何でも処理できる知的な力とすることができであろう。「娘のなかでは母親的なもの-母親的なイメージがまったく布置されることがなく、母親的なやり方で、自分自身に心を配ろうとする動きがまったく見られなくなって」しまうのである。Bはそのときにあっては身体の不調や辛さを訴えることができなかった。#6のエピソードはこのことを表しているように思われる。また家に籠もり初めて、母親の衣服をハサミで切り裂いたということも衣服が心理的にはその人自身のペルソナ（役割）を表していることなどと考え合わせると意味深いことである。

こうして、セラピストが感情を表し、セラピストのなかのクライアント性（苦しむ存在）を表現したことによって、このセラピーは関係のなかへと進み入ることになる。これは関係する相手に気付いていく過程とすることができるであろう。

第2段階はBとクライアントが胎内のような暖かな、薄暗い一室で目覚める話から始まる。「あんたのせいでこうなった。」というBの言葉をクライアントは正面から受け止め、なにも言い返さずにBの傍らに居る経験を語る。セラピストもクライアントの体に対して心が動いている。疲れた表情を指摘すると、ぐっすりと眠りたいと言う。また私が動かないと世界が回らない、と言うクライアントに、たまには世界を止めておいてもいいのではないかと応じている。クライアントは疲れがどっと出たように、体調を崩される。どこが悪いと言うわけではないが、声が出にくかったり、喉が詰まったような感覚をこの時期訴えている。これと同時に卒業式、家族旅行を経て、クライアントの印象は50歳の貫録を感じさせるものとなっている。

身体的な不調は頼りなさ、寄りなさ、心細さを内側に引き起こす。身体の不調を訴えるクライアントはその不調を心配するセラピストの前で、ケアされる体験、心配される心地よさを体験していたように思われる。言葉

少なな、落ち着いた印象のセラピーが続く。勿論、事実の報告は続いていたが、しかしその勢いは以前のようなものではなくなっていた。またBの行動だけではなく、その背後のBの心の動きに言及される話が多くなっていった。さらにBが調子を崩すリズムのようなものをクライアントはつかみかけているということであった。リズムは深く身体性とも関連している。知性でのみ割り切って理解できるものではない。クライアント自身が自己の身体に心が開かれていく過程は、Bの身体的なリズムを感じ取っていく過程と重なって進行していくようにセラピストには感じられたのである。また二人で買い物に行ったさい、店員の対応の悪さにクライアントがはっきりと意志を表したことについて、後でBはあのときの店員の表情が苦しそうでかわいそうだった、と話したことから、私には感じられない他人の感情をBは濃やかに感じ取るのだと言うような報告がなされた。Bも卒業を果たし、時々調子を崩しなから、一仕事終えた印象を深めていた。また1週間にわたる家族旅行も普段の生活では気付かないBの心くばりや、夫とBの交流をクライアントが見るよい機会であったようだった。この段階を経て、セラピストとクライアントの関係は確立したように思われる。先に「関係とは関係する相手への気付きである」と述べたが、セラピストは身体をもったクライアントに気付き始め、クライアントはケアされることを通じて、心細さの体験と、心細くてもそれなりにやっていける、回せていける自分を確認していったのではないと思われる。完全でなければならぬのではなく、疲れていたり、不調であったりしても、それなりにやっていけるケアされる自分とケアする自分のイメージが息づき始めているように感じられた。

第3段階は関係のなかへと入っていく過程である。Bは予備校生活を始める。この始まりは学資を父親に相談して出してもらうという、以前の母親—祖父とBという関係から父母とBという新たな関係で始まる。ちょうど昇格となって、以前にもまして仕事に多忙を極める夫にクライアントはBのことを任せたり、相談したりするようになり始めていく。夫婦関係を見直す動きが始まる。夫婦としての関係が動き始める。Bは友人関係をもととうと必死で動く。クライアントはまた自分の父親との関係の変化を感じ始める。男性像の変化が起こり始める時期でもあった。長女だが長男のように育ち、長男の役割を果たし、夫がいるにもかかわらず母子家庭と意味付けてきた関係がゆっくりと変化しようとし始めていた。この時期、Bは予備校と言う新しい環境で、新しい関係を作ろうと頑張りはじめると同時に、クライアントの

みならず、父親に対しても金銭を欲求するようになり、それはどんどんエスカレートする様子でクライアントを苦しめはじめた。要求に応えられないといつ叩かれるかと思って、胃がぎゅーと痛くなる。そのしんどさを感じながらも、Bはしんどくなると必ず母親が自分をかまってくれると思っているらしいこと、それによって、Bの苦しみのすべてではないにしろ、その場限りにしろ、Bの気持ちは楽になること、それがクライアントの安心感につながることを、徐々に語っていかれるようになる。テストの結果が出たら、つつい励ましてしまう自分、順位に強いこだわりをもつ自分を感じ取っていかれた。苦しかったころの回想もあり、セラピストは胸のつぶれるような思いを抱いた。クライアントのすさまじい体験に涙を流しながらそばにいることしかできないことをセラピストは体験していった。母娘の間の軋轢に夫が父親として割って入る場面もあった。Bが陰悪な表情をし、ものを投げたり、壊したりするさまに「これほどしんどいのか」と泣くクライアントの姿は印象的である。夫もクライアントも疲れを口にし、お互いの体に気を配り始めてもいる。

弱さを自分のなかにもつことは、その自分をケアする自己に対するセラピストを内側にもつことでもある。Bの気持ちを感じ取って泣けて始めて、クライアントはBへの嫌悪感を意識することができるようになったのだと考えられる。#18に見せられたクライアントの手記はそんなクライアントの苦汁に満ちたものであった。「こんな子供を憎んでもいいのか、こんなことまで考えてしまう。」セラピストは黙ってこのクライアントの気持ちを受け止めた。セラピストのなかに子供を憎むであろうクライアントは存在している、クライアントのなかにそれでも自分の子供を抱かえていこうとするセラピストが存在しはじめている。Bは両親を相手に内側の苦しみを行動化し始める。夫婦関係を問い始める新たな状況が始まろうとしていた。

第4段階は関係を生きることの始まりである。Bは母親とその父—祖父の結合を壊そうと動きは始める。これに呼応するようにクライアントは父の介入を受け入れなくなり、自分の父親に始めて反抗しているような気がすると語っている。クライアントのなかの娘性—娘イメージを感じさせる言葉である。これはこのクライアントらしからぬ行為として現れる。すなわち、やけ酒を飲んで、正体を失うという体験にである(#21)。かわいがっている犬の毛をカットして、虎刈りにする。まるで子供のようないたずらである。腹が立つ、叩かせろ、とクライアントの頬を打ち、パジャマをずたずたにしたBはこ

の母親の姿をどんなふうに見守っていたのだろうか、電話を受けて帰宅した夫が見たのはすでに正体を失っている妻の姿であつたらしい。やったことのない我がままだつた、とクライアントは話してくれた。

第4段階はまさに始まったばかりだと思われる。Bからの金銭の要求は一つにはクライアント夫婦が話し合わなければならない問題に発展している。以前のようにクライアントだけが叩かれたり、Bのマッサージをしたり、Bと買い物に出掛けたり、送り迎えをしたり、というクライアント一人で対応できることではなくなっている。大金の欲求にどう応えるか、を話し合っているとき、ふと幼いBを預けて働いていた頃、車でBを迎えにいった、車中で夫とよく話し合ったことをクライアントは思い出す。実家に同居を始めて、実母の死後、家事などについて夫も手伝ってはくれたものの、あのときのような子供を巡っての精神的な話し合いは長い間しなくなっていた。子供のことに限っては夫を頼りにすることはなかった。もう遅いのではないか、そういった不安が頭をもたげていった。セラピストにはむしろやっと一人ではやっていけない、やっていかなくてもいい状態にまでBを支えてきたクライアントとBの関係の深まりを感じさせる言葉であった。さてもうひとつ、金銭の心理学的意味を押さえておく必要がある。お金とは深く人間のエネルギーと関係している。以前のように洋服に集中していた要求が、もちろんそれで衣服も買えるだろうが、それだけではない変換可能性の高い金銭の要求にかわっている。親戚宅に家出したおりに、Bが話していたように、お金を借りてそれを資金に自活するそういう元手にもなるものなのである。お金さえあればすぐさま自立や自活が可能になるという意味ではない。しかしBは両親から心理的自立のためのエネルギーを必要としている、というふうにこの欲求はメタファーを読み解くことはあながち無理なことではないように思われる。育てるべき両親との関係をこういう形でBは切り結び始めたのである。これは決して生易しい関係ではない。しかし、Bがパニックになったときに受け入れられない自分を感じつつも、クライアントはBの不安、Bの弱さもそこに見ることができるようになっている。

入れ子構造のダイナミズム

便宜上、4段階に分けて考察していった。本ケースはさらに回を重ねていくなかで、この1年の期間が「関係への入り口」として再度、意味付けられるときが来るかもしれない。その可能性も否定することはできない。長いセラピー関係のなかでは以上で考察を行ってきた過程

が、螺旋的に展開していくものと予想される。

しかしともかく現時点においては、この1年間を通してセラピストクライアント関係の進展と平行してクライアントとBの関係もある深まりを見せつつ、進展していると考えることができよう。この前提にたつて、筆者が母親面接の構造化の試案としている「入れ子構造」のダイナミズムを考察したい。

まず本ケースでは「その1」(1993)でとりあげたケースとは違って、Bには主治医がいて、その治療関係も母親との関係に重要な役割を果たしていると考えることができよう。「母親に思いのたけをぶつけよ。」というこの主治医の励ましはBにとって大きな支えであったことは想像に難くない。父親との関係にBを誘ったのはこの主治医の働きが大であったのではないかと筆者は考えている。先に述べた個人の自我発達における単極性の元型の進展にBの主治医はおおきな役割を果たしている存在である。この点、セラピストとクライアントはこのBの内的な作業を関係性の点から抱える環境作りを行っているという意味付けることができよう。この点で、「その1」で取り上げたAや先に挙げた男子高校生(ケースC)の母親面接とは異なっている。

また、これは見方を変えると、Bはこの主治医に支えられることなしには母親や父親と関係が結べない状態にあるということもできるであろう。とすると、現在、主治医が果たしている役割は、治療者という役割と同時に、いまだ脆弱なBの自我の代理人もしくは補佐ということができるかもしれない。

こうして考えていくと「入れ子構造」はクライアントである母親の子供を治療するものではない。遠隔操作術ではないのである。子供は子供独自の発達と発達にさいする自己の課題に取り組まなければならない。ケースAやケースCで子供自身に大きな変化が現れたのはこれらのケースが母子関係に起因した関係性の問題を中心にしたケースであったからだと考えることもできよう。「入れ子構造」は母子関係の再構築に何らかの役割を果たしたのである。

さらにもうひとつ加えておくと、AやCのケースではクライアントであった母親と子供との関係が、治療的に展開したことも大きな点だと考えられる。一時期、外との関係を一切遮断して、籠もってしまった子供にとって、その心を開き、その心を受容してくれる存在としての母親の役割は大きかったと考えられる。クライアントである母親とセラピストとの関係の深まりそのものが、治療的働きを果たしたと仮定できよう。さらにそれに伴って多様な関係を体験する可能性が母親と子供の新たな関係、

その親子の独自の関係の進展を可能にしたと考えることもできるであろう。

本ケースの場合、クライアントの心の内では母—娘イメージは隔たっており、エロス（感情、情緒的なつながり）とロゴス（知的な把握）の亀裂も深かった。セラピー関係のなかで、徐々にクライアントのなかの娘イメージは賦活され、大切な他者とのつながり（エロス）が体験され、ゆっくりと結び合わされていったのではないか。これはセラピストにとっては、クライアントに対する情緒的な反応や、感情的な表現での対決となって体験され、具体的かつ1問1答的なアドバイスでは片付けることのできない、関係性の体験にクライアントとともに歩みいったことを意味している。これは圧倒的な存在としてクライアントを苦しめていたそれまでの親子関係に何らかの働きとなって作用し始めていると考えることができよう。

さて最後に、セラピストの体験したクライアントとの関係の変化をたどってみると、無味乾燥な事実の羅列—セラピー関係の支配⇒セラピストの感情体験の表明⇒クライアントの身体性への気付き⇒クライアントの辛さへの共感と素描することができる。

同様に、クライアントの語っていた子供との関係のイメージの展開は、支配、操作⇒子供独自の感情体験への気付き⇒子供のつらさへの共感⇒子供の自然なリズムへの気付き⇒子供の動きと自分との関係への気付きへと進展していった。

まとめにかえて

「関係というものは常になにかそれ自体創造的なものである。」(1978)とGuggenbuhl—Craigは述べている。「入れ子構造」はセラピスト—クライアント関係がクライアントとその子供の関係を同型の入れ子としてその内側に抱える構造としてイメージされた。しかしこれはいずれの場合にしろ、結果論として導き出すことはできても、目的論的に操作することはできない。しかしセ

ラピストとクライアントの間に体験される関係性の歪みやその独自性は、語られる親子関係のひな型であり、進展するその関係は、クライアント親子の間でも同型に近い進展がなされていくととらえることは可能なようである。ここで「入れ子」は常にセラピスト—クライアントが鑄型でクライアントとその子供の関係が常に「入れ子」であるとは断じ得なくなる。

関係の入り口まではセラピスト—クライアント関係がその親子の独自の関係性を体験する「入れ子」のような働きをしていると考えることができるかもしれない。

また今後の課題はこの構造の限界と効用を実際のケースに当たりながら、さらに考察していくことであると考えている。

追記 本稿をまくとめるにあたって、クライアントのプライバシー保護のため、出来る限りの努力をおこなったが、本稿が心理臨床における事例であるので、読者はその点をご留意されることをお願いしたい。

本稿は三船がまとめ、倉戸と検討を加えたうえで、さらに三船がまとめ直したものである。

引用文献

- C.G.Jung.The psychology of the Transference 1953.The collected works of C.G.Jung VOL 16
E.Neumann UNSPRUNGSGESCHICHTE DES — EWVSSTSEINS 1971 WALTER—Verlag.
A.Guggenbuhl—Craig Macht Als Gefahr beim Helfer.1978.Psychologische Praxis Band 45.
M.Mahlev A.Bergman(1975) THE Psychological Birth of the Human Infant Basic Book.
Maro Jacoby The ANALYTIC ENCOUNTER 1984 INNER CITY BOOKS.
神田橋條治 精神療法面接のコツ 岩崎学術出版 1990
三船直子 「入れ子構造」の構築—その1—
大阪市立大学児童家族相談所 紀要 巻10 1993
(平成5年10月12日受理)

Summary

The purpose of this paper is to consider author's hypothesis on "IREKO—Structure" in counseling with a mother whose child doesn't show up to therapy.

The author previously reported a process of counseling with another mother whose child also refused school and didn't come to therapy.

In that paper,the author hypothesised "IREKO—Structure"(1993) The "IREKO—structure" means that any psychological mother—therapist relationship makes new psychological mother—child relationship and these two have the same structure.

The author had reported this process with describing therapist's psychological experience with the mother. Her child seemed to be in neurotic level. In this paper, the author reports the process of counseling with a mother whose child was in schizophrenic level.

In this paper discussed as follows:

1. Considering about therapist-client relationship.
2. Describing the dynamism of The "IREKO-Structure" in this therapy.
3. Pointing out some problems of The "IREKO-Structure".